

ブック村だより

本学コレクション紹介 (20)

- J.S.ミル『自由論』(3)『群己権界論』…………… 森岡 邦泰(1)
 心に残った本との出会い…………… 海堀 勲 (2)
 ぶっくす・なう…………… (4)
- 『謎解きはディナーのあとで』…………… 谷岡 一郎
 『動的平衡 Dynamic Equilibrium;
 生命はなぜそこに宿るのか』…………… 塩田 眞典
 『現代の金融入門【新版】』…………… 佐和 良作
 『日本の美100』…………… 下山 晃
- 学選スタッフ卒業生の声…………… (6)
 【防災メモ】～図書館にいるときに地震が起きたら～…………… (7)
 インフォメーション・開館案内…………… (8)



J.S.ミル『自由論』(3)『群己権界論』上海商務院書館1903年9月出版

(画像は7版(1921年12月出版)阪大附属図書館所蔵)

ミルの『自由論』を初めて中国語に翻訳した嚴復は、民の自治能力は富強の最も基本的な条件であり、自治の根底に「自由」という概念があると考えた。しかしながら「自由」という言葉は中国の聖人が最も恐れたものであり、聖人は一度もそれを教えようとしなかったと言った。嚴復は、聖人が政治的自由は統治にとって危険だと見たと解釈したのであろう。

嚴復が西洋の自由に対応すると考えた「恕」や「矩の道」という概念を日本の知識人も知っていたが、日本人はそこにLibertyを見なかった。日本では西洋語の「自由」と今日訳されている語に

ゴンザ以来一貫して「自由」という訳語を用いている。日本の翻訳者が躊躇したという「自由」という日本語の「勝手気まま」という意味合いは英語のLibertyも持っている。しかしミルの『自由論』に対峙した時、問題となるのは政治的意味での自由であり、日本の翻訳者たちは嚴復のように自由が統治にとって危険になりうるとは思わなかった。日本と中国で同じ古典を共有しながらミルの『自由論』に対する態度にこのような違いが生じたことは、両者の思想風土の違いを推測させるものであろう。

(経済学部 准教授 森岡 邦泰)

心に残った本との出会い

図書館長 海堀 勲

学生時代、わたしは教科書や学習参考書以外に良書を読破しようという意気込みに溢れていました。今もそういう意気込みですが、読書ジャンルの方はあの頃とはかなり違ってしています。時代と年齢のせいでできないことはありませんが、心底好き嫌いという点では今も昔も変わっていないのかもしれない。

それにしても、本というのは何なのだろうか、と自分に問いかけることがあります。答えはいろいろ出てきましたが、それは次々と新しい知恵・知識を開拓する先人から残された記録集に他ならない、という結論に達しました。読書するということは、大学の講義と違って、言わば個人教授を受けることであり、本の値段がその授業料だと考えればいいわけです。何と安価な授業でしょうか。携帯の通話料を節約して本を購入したり、遊ぶ時間を節約して図書館へ行く価値は充分にあることがこれで分かるはずです。

記録集はもちろん古い時代から継続しているわけで、まずは取っつきにくいかもしれませんが順序通り古典から始めるのが妥当でしょう。そのほうが知恵・知識の発展プロセスがよく分かるでしょう。古典は現代の知性すべてを網羅していると言っても過言ではないでしょう。昔の人はまさかこんなことは知らなかっただろう、との憶測の中には現代人の自惚れが含まれています。知性や教養のガイドラインという点では、古典の文学・哲学は間違いなく人間真理の追求に役立つことでしょう。時間をかけて読む価値のある書として、わたしが大学時代によく読んだセネカの「道徳論集」を紹介したいと思います。これは岩波文庫で「人生の短さについて」というタイトルで古くから翻訳されており、本学の学生諸君の愛読書の一つ

であると聞いて喜んでいきます。単純な哲学書だと思っていし、これを読めば即、知識人になれます。警句に満ちた人生の指南書と言えます。人間の不実を信じたり、真実を信じなかったために、あるいは忠告を聞かなかったためにとんでもない過誤に陥る実情を用例に即して分かりやすく解説しています。信じるのが誤りか、はたまた信じないのが誤りなのか、そこのところをわれわれに考えさせてくれます。言わば、認識力と判断力の養成講座です。セネカはわれわれの知性が言い表せないことを巧妙に読者の心の中に浸透させてくれます。人生は苦難に満ちているが、苦勞して暮らすか楽しく暮らすかは十人十色である、と言っているかのようです。

困難にぶつかってセネカと一緒にじっくり考えるのはいいことですが、分からなくてもそういつまでも考え込んではいけません。一区切りをつけて、あとはそのまま放っておく方が却っていいのです。探しても見つからなければ探すのをやめることだと思います。人間誰しも趣味は広いのでまた次の本を選べばそれでいいのだと思ってわたし自身これまでも随分、まったく異なるジャンルの本へと移っていったのを今でも覚えています。異なるジャンルというのは、例えば、梶井基次郎の「檸檬」のような小説に親しんできました。街中を彷徨し、通りがかりの果物屋の前でふと何の気なしに檸檬に心を寄せる。檸檬が主人公を幸福感で満たす最高の場面です。梶井の持ち味である、生と美の探求がなされており、「こ



んなに美しいときが、なぜこんなに短いのだろうか。」などの、きらめかんばかりの描出が続いている箇所は素晴らしいとしか言いようがありません。生来の感性の瞬間だと言えます。一読の価値あり、です。

詩情という点では外国物を忘れてはなりません。詩情溢れる物語であり、フランス文学の影の金字塔、サン・テグジュペリの「星の王子さま」はお勧めのひとつです。星々の間を旅をし続け、



他の星の宇宙世界を観察しつつ、「この地上で一番大切なものは何？」と王子は問い続ける。文明批判、大人への批判を含んだ、涙が出るほど美しい童話(?)です。童話といえばメーテルリンクの「青い鳥」の結末、「幸せは自らの心の中にある」と符合する場面もある点を指摘しておきます。

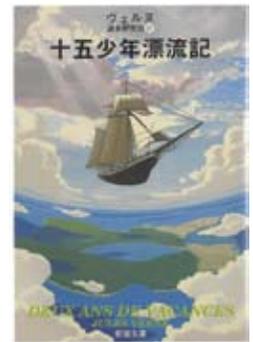
詩そのものはわたしの人生に多大な影響を与えたわけではありませんが、心髄まで詩情が浸透してくるような作品については今でもよくそのときの読後感を記憶しています。精神を潤すことは何よりも大切なことだと思いますし、今でもそう思ってきました。梶井やサン・テグジュペリのような小説は、頭で理解しようとするのではなく、心の隅で体験すればいいのだと思います。体験する分だけ人生の時間を長くしてくれます。考えることは重要ですが、時には感じてみることもいい休息になりますよ。

良い作品はいろいろ教えてくれます。自分の考えも元は人から教わったものです。そう考えるなら読書量を増やすことがいかに大切かわかるはず。特に好きな作品に出会うと、自分が作品の中に入り込めたり、作品が自分の中に入り込んだりするものです。本との出会いはちょうど人との出会いのように、人生を変えていくものなのかも

しれません。ただ、人の言うことを鵜呑みにしてはいけないのと同じように、本に書いてあることも必ずしも信憑性はありません。要は洞察力に磨きをかけることです。そのためには読書ジャンルも増やしていくといいでしょう。「量は質なり」といって、そのうちいい本に巡り会うことでしょう。

「己を知る」とよく言われますが、心底傾倒した作品を通じてひょっとして自分の姿が見えてくるかもしれないのです。それは愛する人を通じて自分を見つめなおすのと似ています。会いたい人に会えていたらいいのになあ、とか、もっと早く会えていたらよかったのに、とかそんな思いが募るように、読みたい本が見つければなあ、とか、もっと早くこの本を読んでいればなあ、と思うようになるでしょう。

私の青年時代に、人と人との出会いということを教えてくれたのは、ジュール・ヴェルヌの「十五少年漂流記」でした。少年たちが知恵と勇気を振り絞って冒険に満ちた原始生活を始める破



目に陥る、という空想科学小説です。そうした状況でごつごつした人間関係が最後には信頼と友情に変わっていくというストーリーです。ヴェルヌはSF小説の祖とされ、これ以外にも豊富な作品群を持つ優れた小説家です。当時最新の科学を駆使して描き出した彼の世界の見事なことといったらありません、それにそこへ読者を最後まで引き込む秀でた文章力には目を見張るものがあります。彼の作品は50冊は読みましたが、そこから工夫、知恵、勇気というものを学んだ気がします。

セネカによって心と知識が豊かになれば理想的ですが、ヴェルヌと一緒に娯楽の旅にでかけるのもいいし、梶井やサン・テグジュペリに倣って自分の感性を試してみるのもいいだろうと思います。

『謎解きはディナーのあとで』

(小学館, 2010.9)
東川 篤哉 著

本の装丁や帯(オビ)、いわゆる本のデザイン的外観がきれいだと、つい手に取ってパラパラと見たくなる本というものがあるものだ。最近売り出し中の中村佑介氏(本欄で紹介した『夜は短し歩けよ乙女』のイラストもこの人)の表紙絵が中味のおもしろさを示唆する本書は、実は中味もスグレモノだ。

オビには「失礼ながら、お嬢様の目は節穴でございますか?」というセリフが書かれていて、本書の主人公、若き執事の丁寧だが毒舌の性格がよく出ている。実際読んでみて、こんな慥慥無礼な奴はR.R.マーティンの『タフの方船』以来だなど感じるほど。しかしいつの間にか、執事が仕えるセレブのお嬢様より、この執事のファンになっている自身を発見することになる。

探偵役の慥慥な執事で想い出すのは、アシモフの黒後家蜘蛛シリーズのヘンリーだが、あえて較べるなら、北村薫のベッキーさんシリーズに近い設定。ただしベッキーさんと

本書の執事の性格は天地ほども違う。状況を聞くだけで謎解きをする、一種の安楽椅子モノという点では共通している。



謎解き自体もうまく出来ていて楽しめるのだが、本書の最大の魅力はなんと言ってもユーモア溢れる会話と文章にある。ワキ役もなかなかのものだ。学長は予言する、『夜は短し...』がそうであったように、来年の本屋大賞はこの作品で決まり。

(学長 谷岡 一郎)

『動的平衡 Dynamic Equilibrium ; 生命はなぜそこに宿るのか』

(木楽舎, 2009.2)
福岡 伸一 著

分子生物学者の手による本書はよく読まれているらしい。なるほど、学の実験部分が解りやすく面白く説かれており、その分野の知見を深めることができる。が、お勧めの理由はそこにあるわけではない。本書の魅力は多分「動的平衡」なる概念が読者に喚起する知的想像力という点にある。

人体を機械に喩えてみる。心臓や肺臓、胃腸等はパーツとみなされよう。しかし人は物を食べ分解し吸収する。結果、機械とは異なり各パーツを構成する細胞は分子レベルにおいて絶えず入れ替わる。このようなマイクロレベルでの流れの中で人体は揺らぎつつもある種の秩序を保つ。こういった事態を動的平衡という。著者は生命現象の本質を動的平衡の中にみる。これは機械論的思考、デカルト的思考と鋭く対立する発想だ。

どうやらこの発想は、スポーツ、武術、舞踊さらには芸術の各分野で道を極めようとする人達が目指す何かと相通じるようだ。それは不可逆的な時の流れの中で不確定要素をはらみつつも絶妙な

バランスを保つ営み。それゆえ、この概念は固有の分野を越境し、読者の問題意識に応じ知的想像力を刺激する。私はといえば、ルーアン大聖堂を巡るモネの一連の絵画群の中に、あるいはフルトヴェングラーによるベートーヴェンやブラームスの演奏の中に、動的平衡の実践をみる。

(経済学部 教授 塩田 真典)



『現代の金融入門【新版】』

(筑摩新書, 2010.2)
池尾 和人 著

金融ということばを聞くと、ここ2～3年アメリカを中心とした先進地域で発生した一連の金融危機を連想し、恐ろしいが、それでも自分とは関わりのない分野という印象を持っている人が多いだろう。

金融論に金融工学という分野がある。金融工学の研究者がノーベル経済学賞を受賞するなど、華々しくもはやされた時期があった。しかし、その後サブプライムローン問題など金融工学によって編みだされた金融商品が深刻な問題を引き起こし、金融工学万能という考え方は大きな反省を迫られた。

こうした時代とともに大きく変化する金融を取り扱う教科書に、これまで人に勧めることができる良書は少なかった。多くの人にとって理解不能と

もいえる、高度の数学を駆使した難解な本、金融の一分野だけをやさしく、面白おかしく描いたような本などが多かった。

この本は、金融のすべての分野を網羅的かつ深く、一方では平易に記述できている入門書である。一部数式を使って説明しているところがあり、難しく見えるかもしれないが、別にその部分を飛ばして読み進んでも何ら支障はない。金融論の講義を担当している筆者が初めてお目にかかった万人に推奨できる金融の書である。金融に関する知識を学ぶ際に必要なことのほとんどをこの本から吸収できる。さっそくゼミの教科書に採用した。

(経済学部 教授 佐和 良作)



『日本の美100』

(平凡社, 2008.10)
コロナ・ブックス編集部 著

きれいなもの、大切にしたいもの、心打たれるもの、やすらぎを恵んでくれるもの、自分をいつの間にか別世界の螺旋に落とし込んでくれるもの、——美しいものは案外、身のまわりにある。

この本には、大阪うどんや日の丸弁当の写真が、国宝絵画や伊勢神宮の写真と一緒に載っている。路地の石仏や一枚の障子が、雪舟の水墨画や源氏物語絵巻と並べて紹介されている。ちょっとした棚田の写真も、新鮮な驚きをさそう形で収録されている。

この本に掲載された写真、見方によってはどれも時代ごと、地域ごとの奇跡のような何か大切なモノに気づかせてくれる。そうした奇跡の遺物や心性を、日本という国はどんな動乱の時代にも大事に大事にのこし続けてきたのだな、というこ

とが良くわかる。25歳の娘にきくと、「私、受験で日本史選択しなかったから、日本史や日本文化については何も知らないねん」と言う。あるモノの価値を

知らないと、その貴重な価値あるモノが無くなっても、その無くなることの意味の重大さはわからない。けど、グローバル化時代であるからこそ、本書のような日本文化史の上質なダイジェストが多くの日本の若い人たちの脳髄に念写されておくべきじゃないのかなと、ほくは強く思うのである。すごく強く。

次の休日、デジカメを片手に町角のお地藏さんでも撮りに行ってみよう。歴史と文化が、君のてのひらにつながって来るはず。

髭の肖像 平家は驕らずとも滅び 響太郎

(総合経営学部 教授 下山 晃)



学選スタッフ卒業生の声

学生選書スタッフOB 高瀬千尋さん（総合経営学部経営学科2010年3月卒業）より、学生のみなさんへ、「学生時代に読んで欲しい図書」を紹介頂きました。

読書の秋と言いますが、大学生ほど本を読むのに適した時期はないのではないのでしょうか。

理由はいくつかあり、まず時間があること。次に必要性があること。最後に大学図書館があることです。どれも説明不要に思いますがここはやっぱり大学図書館の便利さを押しておきます（笑）毎日通る場所に図書館があって自由に・無料で本が読み・借りて帰ることが出来るのは実はすごいことです。手に取って読んでみて面白くなかったら棚に戻せばいい。面白ければ関連書籍を探すことも出来る。

今回、大学生にお薦めする本、ということで2冊選んでみました。もし興味のある本があればお財布に優しい大学図書館で探してみてください。

「ローマ人の物語」塩野七生（著）

名前を知っている人も多いのでは？ 言わずと知れた超長編歴史物語です。現在文庫本で40冊刊行されているので、手にとるのをためらう人も多はず。

塩野七生の書く文章を『小説』というのか『伝記物』というのか断言することは出来ません。まるでそこにいたかのような心理描写と膨大な資料に裏づけされた歴史観がこの長い物語を飽きさせることなく読ませます。

この本をお薦めする本として第一に取り上げた理由に「長いから」というのがあります。つまり「学生時代に長い本を読んで抵抗感をなくしてしまおう」です。

長いからという理由で読みたい・おもしろい本を逃すのはとてももったいないけど現実には「全7冊か。長いなあ」という気持ちが生まれるのもよく分かります。でもそこで「そういや昔40冊近いシリーズを読んだなあ」なんて経験があればどうでしょう？ 「全7冊？軽い軽い」となるかも知

れません。

ちなみに歴史物で有名な塩野七生ですがエッセイも非常に面白いです。イタリア在住の著者のイタリア考は長編シリーズとはまた違う魅力があります。通学電車の中で読むのにオススメです。

「風が強く吹いている」三浦しをん（著）

駅伝—— ちょっと日常生活からは離れた単語ですよ。これは箱根駅伝にチャレンジする男子大学生の小説です。駅伝を知らなくても興味なくても大丈夫。

故障を抱えたかつての名ランナー・ハイジと高校時代に陸上で活躍しておきながら問題を起こし競技から離れたランナー・カケル。この二人が出会うことで物語は始まります。

舞台は大学生寮『竹青荘』、ここに暮らす経験者2人＋素人8人の計10人が箱根駅伝を走ります。一見すると「何だ、スポーツものか」と思いそうですが、そんなことはなく大学生のだからとした日常や同年代が10人集まって暮らす寮独特の雰囲気も楽しめますよ。

高校時代のトラウマで人を信用しきれないカケルが癖のある住人たちと打ち解けて仲間になっていく様子もさることながら、この小説の見所は箱根駅伝そのものだと思います。

口のうまいハイジに乗せられて駅伝に興味のなかった住人がいつの間にか箱根駅伝を目指すことになり、練習を始め、予選が始まる。箱根駅伝出場が叶い、走者と伴走者と変わる視点の中で語られる「走るってどういうことなのか」、この答えは最後に示されます。

考えながらもただただ走る彼らを青臭いなあと思うのは簡単ですが、だからこそ学生時代に読んで良かったと思える小説の一つです。これは青臭い学生時代を送ってないと思う人にこそ読んでほしい本でもあります。

私の好きな本を好きになってくれる人がいれば幸いです。

【防災メモ】～図書館にいるときに地震が起きたら～



いざという時のために、日頃からの心構えが大切です。
まさか自分がと思わずに普段から身を守る方法を知っておきましょう。



頭部を保護し安全な場所で身構える

- ・ グラッと揺れたら机の下などで身を守り、大きな揺れがおさまるのを待ちましょう

本棚の周辺にいる場合は直ちに離れる

- ・ 大きな揺れたと、本が棚から落ちたり飛んできたりして、凶器に変わります

揺れがおさまれば、冷静に危険回避の行動を

- ・ 慌てて出入り口に殺到すると危険です
- ・ 走ったり押したりせずに、冷静に行動しましょう



エレベーターは使わない

- ・ 2階出入り口までは階段を使って降りてください
- ・ エレベーター内で揺れを感じた場合は、最も近い階で降りてください
- ・ 揺れによる停電でエレベーターが急停止し、閉じ込められる恐れがあります
- ・ 万が一、階段が使えない状況には各階に緩降機*があります
- ・ 車いすなどで階段が使えない方は、図書館員の指示に従ってください



※ 緩降機とは

着用具と呼ばれる輪に体を通し、ロープに吊り下げられて降下し、避難するための機具です。

機具の前面に取り扱い方法が記載されています。

一度館内の設置場所を確認しておくのもいいでしょう。

図書館インフォメーション

◆卒業生（保護者・地域住民の方）も、図書館をご利用になれます

公的機関発行の身分証明書および写真（横3cm×縦4cm）、外部の方は利用登録料1,000円をご持参下さい。定められた範囲での閲覧・貸出・所蔵資料の複写が可能です。ご希望の方は2F受付まで。

◆図書館グッズとして葉を作成しました！

2階カウンターで図書の貸出しの際に、葉を一枚お配りしています。全8種類で、裏面には図書館利用についての豆知識も載っています。枚数に限りがありますので、なくなり次第配布終了となります。読書の秋です！これを機会にぜひ図書館へお越しください。



◆平成22年度上半期に寄贈された本学教員著書は下記の通りです。

（教員名の50音順）※配架場所は2F「本学教員著書コーナー」です。貸出もできます。

- 【**桑野 博行** 先生】『産地の変貌と人的ネットワーク』 御茶の水書房，2010.3. 【請求記号：583.7/Ku37】
- 【**中津 孝司** 先生】『米中協調の世界経済』 同文館出版，2010.3. 【請求記号：333.6/N43】
『チャンスをつかむ中小企業』 創成社，2010.4. 【請求記号：335.35/N43】
- 【**藤本 清一** 先生】『所得税入門の入門 平成22年度版』 税務研究会出版局，2010.5. 【請求記号：345.3/F62】
- 【**前田 啓一** 先生】『日本のインキュベーション』 ナカニシヤ出版，2008.3. 【請求記号：335/Ma26】
『岐路に立つ地域中小企業』 ナカニシヤ出版，2005.4. 【請求記号：509.216/Ma26】
- 【**水谷 淳** 先生】『現代経済ナビゲーター』 八千代出版，2010.4. 【請求記号：332.107/Mi97】
- 【**八尾 晃** 先生】『eビジネスの基礎と実践』 東京経済情報出版，2010.4. 【請求記号：670/Y59】

開館案内

| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|----|----|----|----|----|----|----|
| | | | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 |
| 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 |
| 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 |
| 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | |

| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|-------|-------|----|----|----|----|----|
| | | | | | | 1 |
| 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
| 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 |
| 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 |
| 23/30 | 24/31 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 |

●は休館日です。

上記以外にも臨時休館日を設定場合があります。

開館日程および時間に変更されることがあります。

詳細は学内掲示・モニター・ホームページ等でお知らせ致します。

大阪商業大学図書館報「ブック村だより」第37号 平成22年11月30日発行
〒577-8505 東大阪市御厨栄町4-1-10 電話 (06) 6781-5280 FAX (06) 6781-0089
e-mail : lib@oucow.daishodai.ac.jp ホームページアドレス : <http://www.lib.daishodai.ac.jp>

大阪商業大学図書館

ISSN 1346-8928